

第6次 五ヶ瀬町総合計画

Gokase Town Master Plan

2021 ▶ 2030



令和3年
宮崎県 五ヶ瀬町



ごあいさつ

平成から令和へ、新しい時代の幕開けから2年が経ちました。

五ヶ瀬町では、平成23年3月に第5次五ヶ瀬町総合計画を策定して以来、10年の歳月が経過し、この間、「ずっと五ヶ瀬 やっぱり五ヶ瀬 ～ありがとう あふれる笑顔～」を合言葉に、人間性回復のまちづくり、循環型社会・低炭素社会の実現、分権型社会への対応を重点戦略と位置付け、町民の皆さんとともにまちづくりの施策を展開してきたことで、一定の成果があったものの、未だ人口減少に歯止めがかかりません。



我が国では、少子高齢化や人口減少社会の到来、AIやIoTといった先進技術の急速な進展による産業・就業構造の変化、地球温暖化に起因する気候変動がもたらす環境変化や自然災害の激甚化など、様々な課題への対応が求められております。新しい時代においても持続可能な発展を遂げていくために、これらの課題に時機を失することなく的確に対応することが重要となってきます。

これらの現状や社会情勢を見据え、五ヶ瀬町では、令和3年度を初年度とし、令和12年度までの10年間の新たなまちづくりに向けての指針となる「第6次五ヶ瀬町総合計画」を策定いたしました。

この計画は、持続可能な五ヶ瀬町を構築するために、町民と行政が一体となり、本町の魅力ある「地域資源」を最大限に活用し、地域を構成する「人」を育み、「持続可能な地域づくり」を可能にしていく流れを創出することで、「人と『ともに』 地域と『ともに』 自然と『ともに』 ～笑顔でつながるまち 五ヶ瀬～」の実現を目指します。

今回策定した本計画を着実に推進するために、町民の皆様と行政が目標を共有し、ともに知恵を出し、ともに行動することが重要ですので、今後ともより一層のご理解とご協力をお願いいたします。

結びに、本計画の策定にあたり、熱心にご審議いただきました総合計画審議会の皆様をはじめ、アンケート調査やまちづくり報告会等において貴重なご意見、ご指導を賜りました町民の皆様並びに関係各位に心から感謝とお礼を申し上げます。

令和3年3月

五ヶ瀬町長 原 田 俊 平

目次

第1部 序章

第1章 計画策定の趣旨・計画の役割	
(1) 計画策定の趣旨	2
(2) 計画の構成と期間	3
第2章 五ヶ瀬町の姿	
(1) 五ヶ瀬町の特徴	4
1 地理・地勢	4
2 歴史・沿革	5
(2) データでみる五ヶ瀬町	5
1 人口・世帯数	5
2 人口動態	7
(3) まちづくりに対する住民の意向	8
1 調査の実施概要	8
2 調査結果	9
(4) 時代の潮流とまちづくりの課題	14

第2部 基本構想

第1章 五ヶ瀬町の将来像	
(1) 五ヶ瀬町の将来像	20
(2) 将来像実現のための視点	22
第2章 五ヶ瀬町の将来人口	
(1) 将来人口の予測	23
(2) 人口の安定化シナリオ	24
第3章 基本計画の方針	
(1) 基本目標について	25
1 安心して快適な暮らしを維持する	25
2 魅力・活力を生み出す	25
3 地域で支えあい、健康で生涯元気に暮らす	26
4 豊かな人・心を育む	26
5 持続可能なまちづくりを推進する	26
(2) 計画の体系	27

第3部 基本計画

第1章 基本目標1 安心で快適な暮らしを維持する

1	住宅・宅地の整備促進	34
2	道路交通網の充実	36
3	公共交通の充実	38
4	水道の整備	40
5	自然環境の保全	42
6	消防・防災対策の充実	46
7	防犯・交通安全の推進	50

第2章 基本目標2 魅力・活力を生み出す

1	農業の振興	54
2	林業の振興	58
3	商工業の振興	62
4	観光の振興	64
5	就労・雇用の促進	68

第3章 基本目標3 地域で支えあい、健康で生涯元気に暮らす

1	地域福祉の充実	72
2	高齢者福祉の充実	74
3	障がい者福祉の充実	78
4	子育て支援の充実	80
5	健康づくりの推進	84
6	安心な医療体制の確保	86

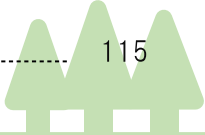
第4章 基本目標4 豊かな人・心を育む

1	学校教育の充実	90
2	社会教育の充実	94
3	スポーツの振興	96
4	歴史文化の継承と芸術文化の振興	100
5	人権尊重・男女共同参画の推進	102

第5章 基本目標5 持続可能なまちづくりを推進する

1	効率的な行財政運営	106
2	持続可能な地域づくりの推進	110
3	情報化社会の構築	112

資料編	115
-----	-----



第1部 序章

Introduction

第1章

計画策定の趣旨・計画の役割

第2章

五ヶ瀬町の姿

第1章

計画策定の趣旨・計画の役割



(1) 計画策定の趣旨

本町は、昭和45年に第1次総合計画を策定し、昭和56年に第2次計画、平成3年には「地域の特性を活かしたところ豊かで活力ある森林郷づくり」を将来像として第3次計画を策定、平成13年度には「ユニバーサルコミュニティ五ヶ瀬 ～おかえりなさい 心のふるさと 五ヶ瀬町～」の実現を目指して第4次計画を策定しました。平成23年には「人の心を大切にする町」をコンセプトに「人間性回復のまちづくり」「循環型社会・低炭素社会の実現」「分権型社会への対応」の3つを重点戦略と位置付けた第5次計画を策定し、「ずっと五ヶ瀬 やっぱ五ヶ瀬 ～ありがとう あふれる笑顔～」を合言葉に、住民と行政が一体となってまちづくりに取り組んできました。

この間地方を取り巻く環境は、少子高齢化及び人口減少の一層の進行、世界的な経済・金融危機に伴う経済格差の拡大、第4次産業革命等による **Society5.0**^{〔※1〕}の到来、地球規模でとらえなければならない環境問題や、東日本大震災・各地での豪雨災害等を契機とした安心・安全に対する意識の高揚など、社会情勢は目まぐるしく変化しています。

また、平成27年に国連総会において持続可能な社会を実現するための国際目標「**持続可能な開発目標（SDGs）**^{〔※2〕}」が採択されました。このSDGsは、地球上で「誰一人取り残さない」ことを誓い、その実現のために17のゴール（目標）を設定したものです。発展途上国のみならず、先進国自身が取り組むユニバーサル（普遍的）な目標であり、各自治体や企業等においても、SDGsの実現に向けて責任を果たしていくことが求められています。

そういった中、複雑多様化する地域課題を解決していくためには、あらゆる分野、あらゆる主体が連携し、住民協働のもと、課題解決にあたっていくことが必要となっています。そういった観点から、今後の本町のまちづくりにおいては、人口を維持するための取り組みを進めていくことはもちろん、人口が減少してもまちの機能を維持し、活力を損なわないための仕組みづくりにも取り組むことで、「持続可能な地域社会」を構築していくことが求められます。

「第6次五ヶ瀬町総合計画」（以下、本計画という）は、この持続可能な地域社会を構築するために、行政が担うべき役割と住民が担うべき役割を整理し、住民と行政が一体となり、総合的かつ計画的にまちづくりを推進していくことを目的として策定するものです。

（２）計画の構成と期間

本計画は、「基本構想」・「基本計画」、別に定める「実施計画」により構成します。

本町のまちづくりの考え方や将来像及び将来像の実現に向けた視点、さらに、将来像の実現を目指した各施策の大綱を示したものです。

【期間】令和３年度 ▶▶▶ 令和１２年度

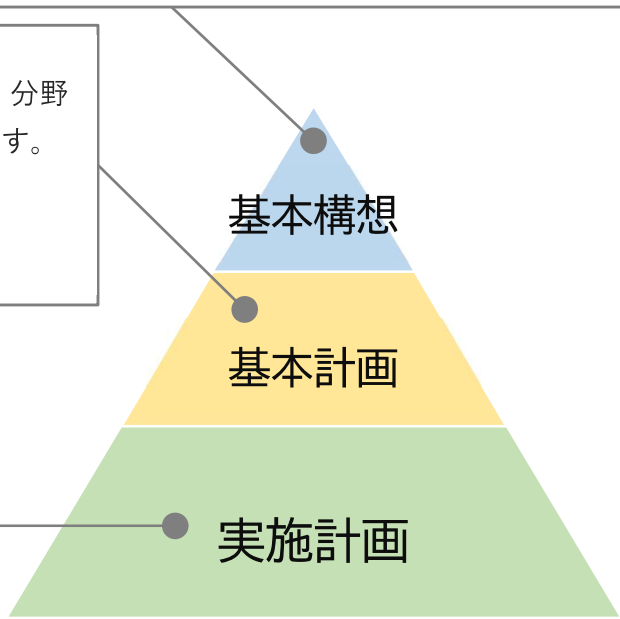
基本構想に掲げられた将来像を実現するため、分野ごとの現状と課題、施策の方向性を定めたものです。

【期間】

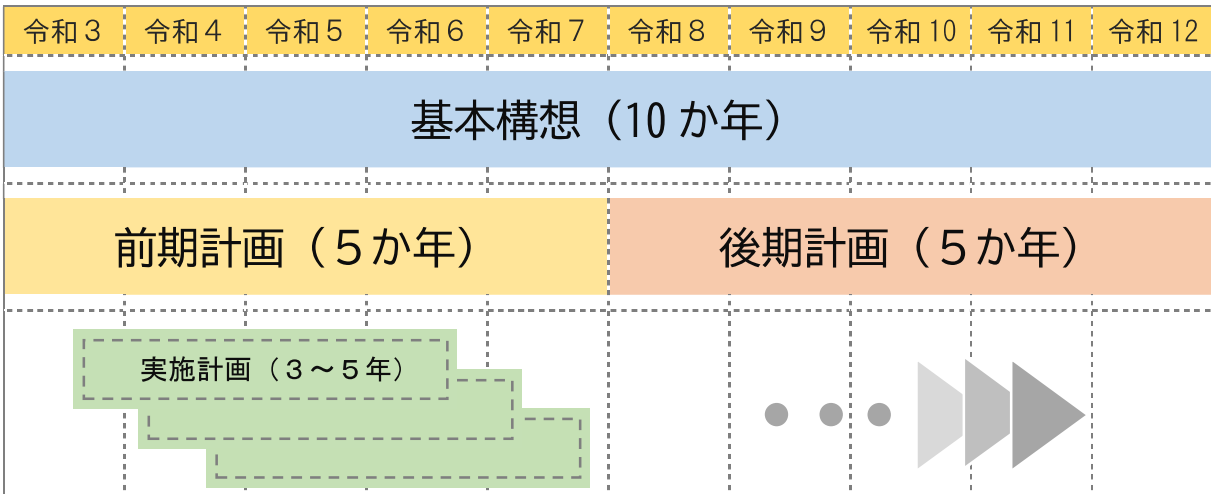
前期：令和３年度 ▶▶▶ 令和７年度

後期：令和８年度 ▶▶▶ 令和１２年度

基本計画に基づいた施策を効果的に実施するため、具体的に実施する事業を定めるものであり、事業の優先順位や具体的な事業内容、財源等を示すことにより予算編成の指針となるものです。実施計画は、総合計画と別途策定し、PDCA サイクル【※３】による評価・見直しを行います。



■ 計画の期間



【※１】**Society5.0**…狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）に続く第５の新たな社会として、技術革新を最大限活用して実現する超スマート社会を指す。

【※２】**持続可能な開発目標（SDGs）**…32P を参照。

【※３】**PDCA サイクル**…計画の推進において、Plan(計画の策定)–Do(計画の実行)–Check(実施状況の確認・評価)–Action(評価結果の計画への反映・計画の見直しとその実行)の手順を循環させることで、継続的に計画の実効性を高めていく手法・考え方。

第2章

五ヶ瀬町の姿



(1) 五ヶ瀬町の特徴

1 地理・地勢

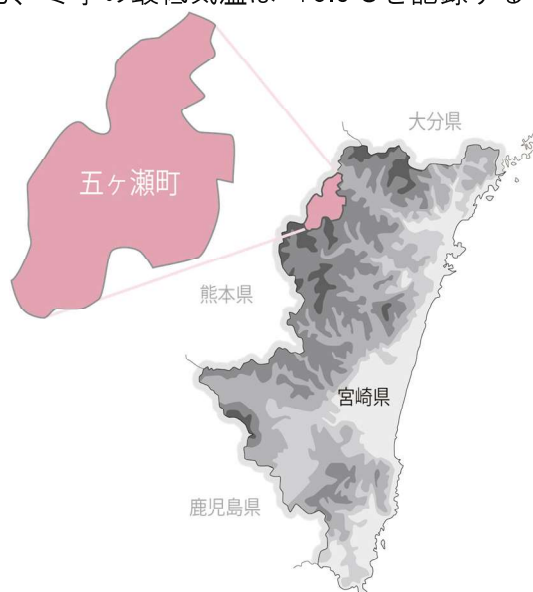
本町は、九州のほぼ中央、宮崎県の北西部にあり、宮崎の西の玄関口に位置し、東部は高千穂町、南部は椎葉村、北部から西部は熊本県に接しています。南西部から南部、南東部にかけては標高 1,200m から 1,600m 級の山々が連なる一方で、北西部には阿蘇の山々を展望できるなだらかな丘陵地帯が広がっています。

町の総面積は 171.73km、全体的に地形は急峻で総面積の 88.1%を森林が占めています。その山峡部を五ヶ瀬川本流とその支流である三ヶ所川が並行して北上し、熊本県で合流して高千穂町や延岡市等を経て日向灘へと注いでいます。この二つの川沿いに大小の集落と狭小な耕地が点在しています。

地質は、秩父古生層に属する粘板岩、頁岩を基盤とするものと、阿蘇火山系の噴出物によって生成された安山岩からなり、土壌の地味は肥沃で農作物、樹木の生育に適しています。

気温は、平均標高が 620m と高いため、過去 5 年間の年間平均気温は 13.2℃と冷涼な地域となっています。しかし、夏季の最高気温が 34.4℃まで上昇する一方、冬季の最低気温は-10.6℃を記録するなど、気温の年間較差は極めて大きいことが特徴です。特に冬季における低温や積雪、さらには 10 月初旬から 4 月下旬にかけての降霜は農作物生育の阻害要因となっており、温暖な宮崎県にあって特異な気象条件下にあります。

平均雨量は年間 2,500mm に達し、樹木の生育を助長するとともに、水源の供給地域として下流域の人々にとって重要な役割を果たしている地域ともなっています。本町は急峻な地形であるため、夏場の台風や集中豪雨の時期には土砂崩れなどの災害が発生しやすい状況にあります。また、冬季には積雪・凍結のために通行止めやチェーン規制等の交通規制がなされる状況にあります。



2 歴史・沿革

本町は、昭和 31 年に三ヶ所村、鞍岡村が合併して、五ヶ瀬町として町制を施行し、令和 3 年度には町制 65 周年を迎えます。

「五ヶ瀬町」の由来となった五ヶ瀬川は、住民の生活上切り離すことのできないものであり、太平洋にそそぐ大河で、他地方にもよくその名を知られている川です。本町の町名には、「清く美しい、悠久に流れる五ヶ瀬川のように、町が発展していくように」という住民の希望が込められています。

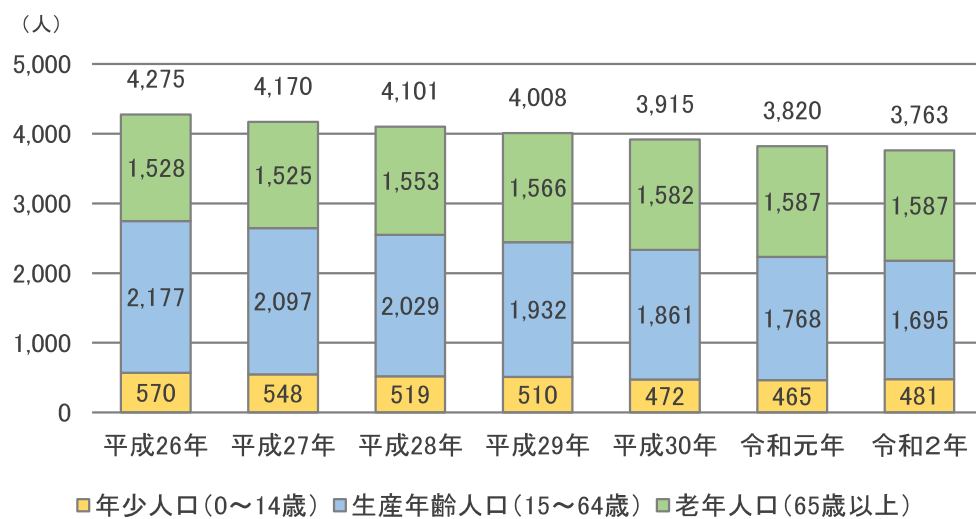
(2) データでみる五ヶ瀬町

1 人口・世帯数

人口

総人口は年々減少を続けており、平成 30 年に 4,000 人を下回り、令和元年には 3,820 人、令和 2 年には 3,763 人となっています。また、年少人口、生産年齢人口の減少が顕著であり、令和元年には全人口の約 4 割が高齢者となっています。

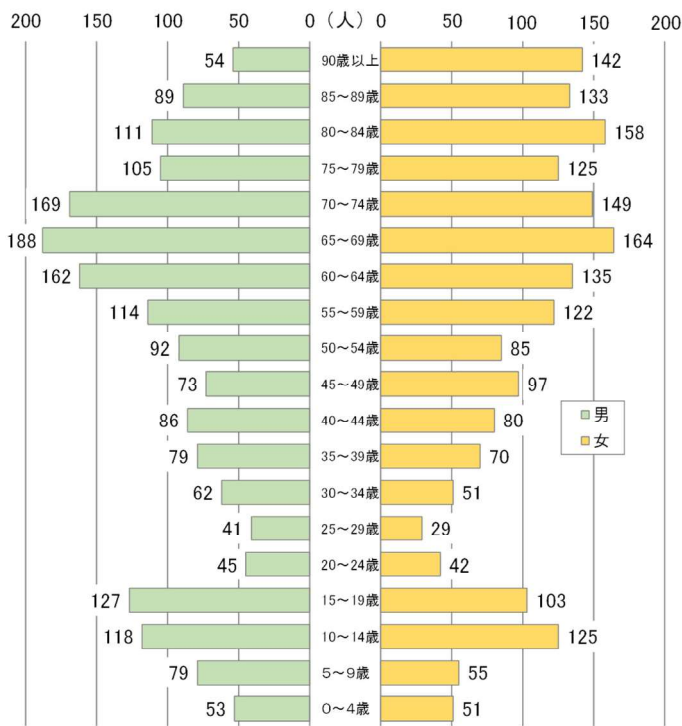
■ 総人口の推移（各年 9 月時点、令和 2 年のみ 4 月時点）



資料：住民基本台帳

令和2年の年代別人口をみると、60歳以上の人口が多くなっている一方、20歳代の人口は少なくなっています。

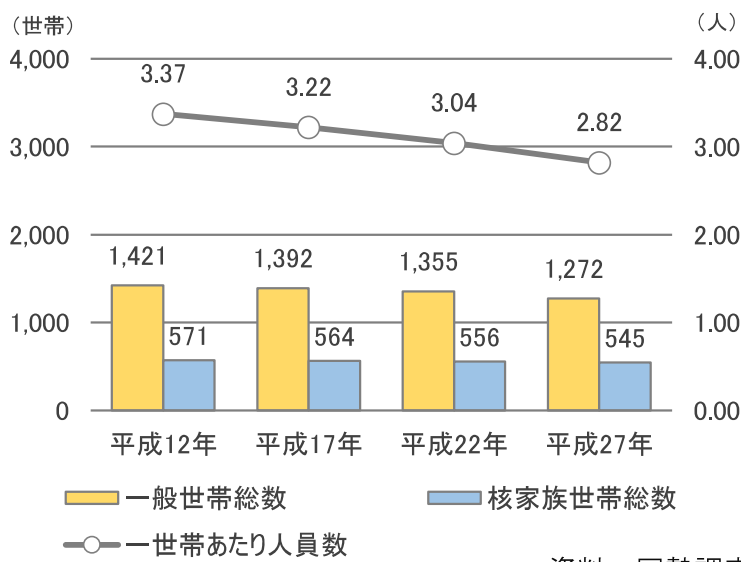
令和2年の年代別人口（令和2年4月時点）



資料：住民基本台帳

世帯数

一般世帯総数・核家族【※1】世帯総数ともに減少している傾向にあります。核家族世帯総数は一般世帯総数に比べて減少数が少ないため、一般世帯総数に占める核家族世帯数の割合は年々高くなっています。核家族化が進行しているとともに、一世帯あたり人員数も減少しています。



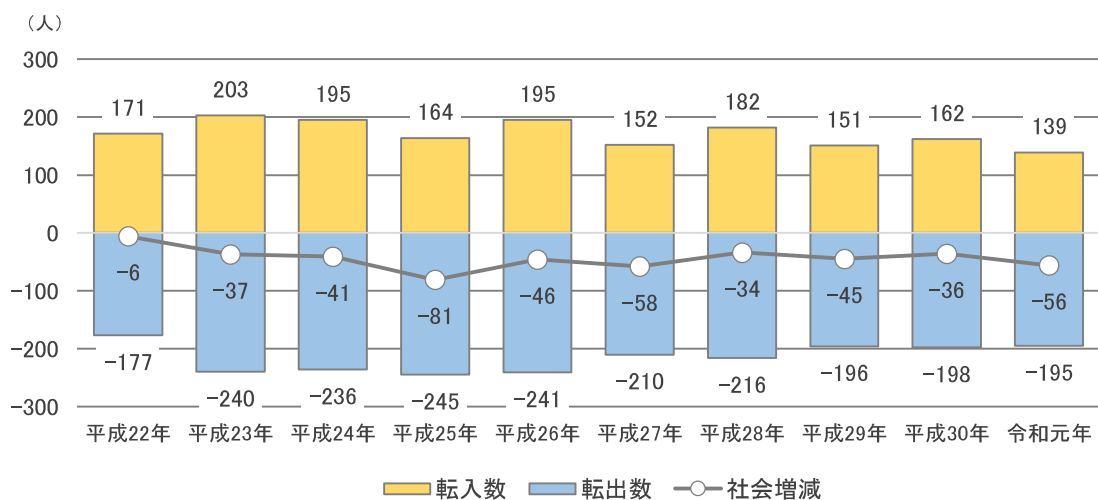
資料：国勢調査

【※1】核家族…一組の夫婦のみ、一組の夫婦とその子ども、父子世帯や母子世帯、両親または父母のどちらか一方と未婚の兄弟姉妹のいずれかからなる家族を指す。

2 人口動態

社会動態

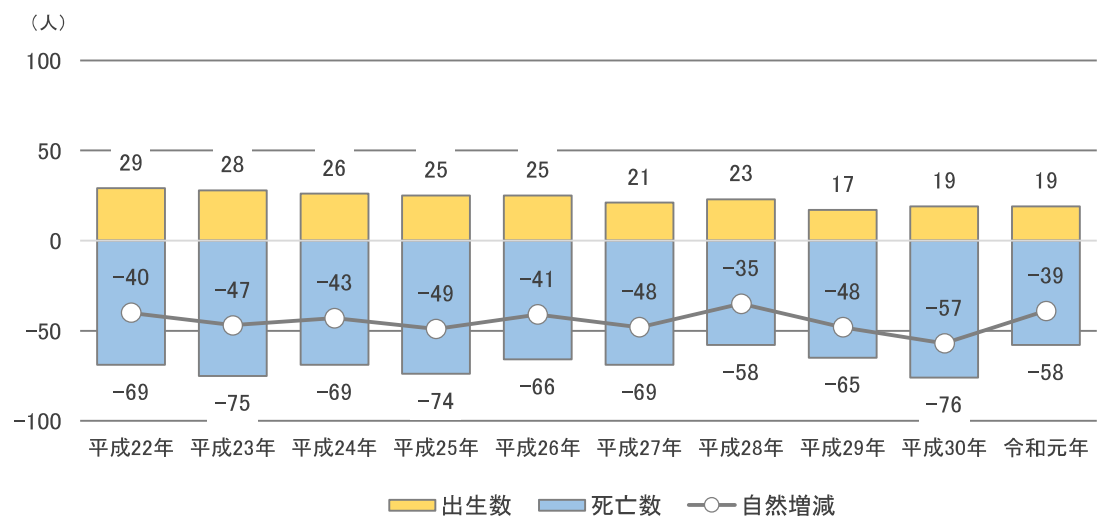
転入数・転出数ともに年々減少している傾向にあり、令和元年には転入数は139人、転出数は195人となっています。転出数が転入数を上回る社会減の状態が続いており、近年の傾向をみると、転入数は年々減少している傾向であるのに対し、転出数は横ばいであることから、今後も社会減の状態が継続していくことが考えられます。



資料：住民基本台帳

自然動態

出生数は年々減少している傾向にあり、死亡数については、60人から70人程度で増減をしつつ推移しています。出生数に対して死亡数が上回る自然減の状態が続いており、40人から50人前後の自然減で推移しています。



資料：住民基本台帳

(3) まちづくりに対する住民の意向

本計画の策定にあたり、住民の意見を計画に反映させることを目的とし、五ヶ瀬町在住の住民と中学生、中等教育学校〔後期生〕を対象にしたアンケート調査を実施しました。

1 調査の実施概要

一般調査

- ▶ **調査地域**：五ヶ瀬町全域
- ▶ **調査対象**：五ヶ瀬町在住の住民 3,169 人(18 歳以上)
- ▶ **調査期間**：令和元年8月9日～9月 25 日
- ▶ **調査方法**：組による配布、回収及び郵送による配布、回収

中学生調査

- ▶ **調査地域**：五ヶ瀬中学校及び五ヶ瀬中等教育学校
- ▶ **調査対象**：五ヶ瀬中学校 65 人、五ヶ瀬中等教育学校〔前期生〕118 人 計:183 人
- ▶ **調査期間**：令和元年 10 月2日～10 月 15 日
- ▶ **調査方法**：学校による配布、回収

中等教育学校〔後期生〕調査

- ▶ **調査地域**：五ヶ瀬中等教育学校
- ▶ **調査対象**：五ヶ瀬中等教育学校〔後期生〕109 人
- ▶ **調査期間**：令和元年 10 月2日～10 月 15 日
- ▶ **調査方法**：学校による配布、回収

	配布数 (A)	有効回収票数 (B)	回収率 $\frac{(B)}{(A)}$
一般調査	3,169	2,100	66.3%
中学生調査	183	183	100.0%
中等教育学校〔後期生〕調査	109	105	96.3%

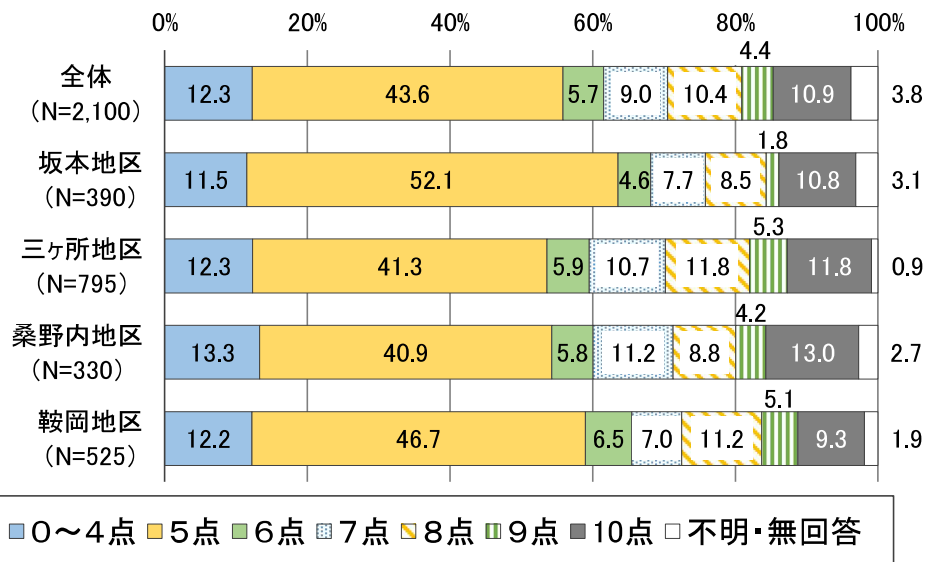
2 調査結果

1 五ヶ瀬町での暮らしにおける幸福度

幸福度を点数として表し、回答していただいた結果についてみると、町全体では「5点」が43.6%と最も高くなっています。

地区別にみると、どの地区も「5点」の割合が最も高くなっています。また、三ヶ所地区、桑野内地区では6点以上の割合が他の2地区よりも比較的高くなっています。

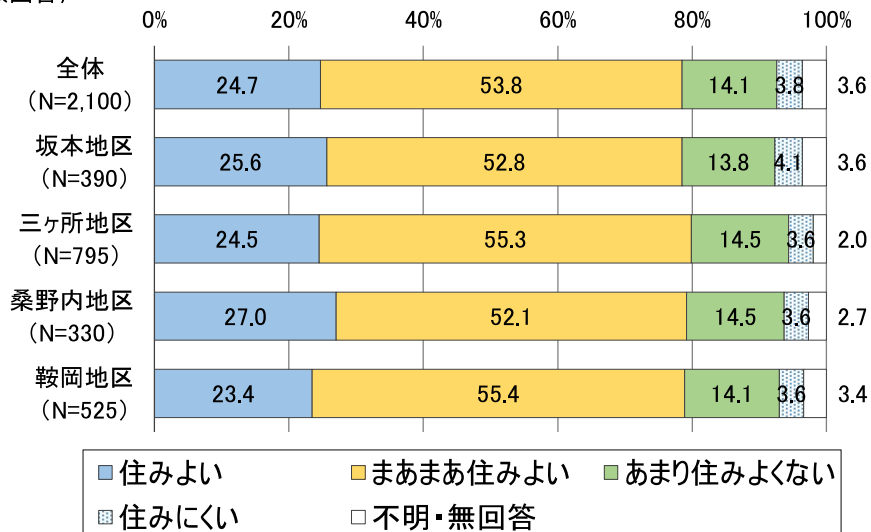
〈単数回答〉



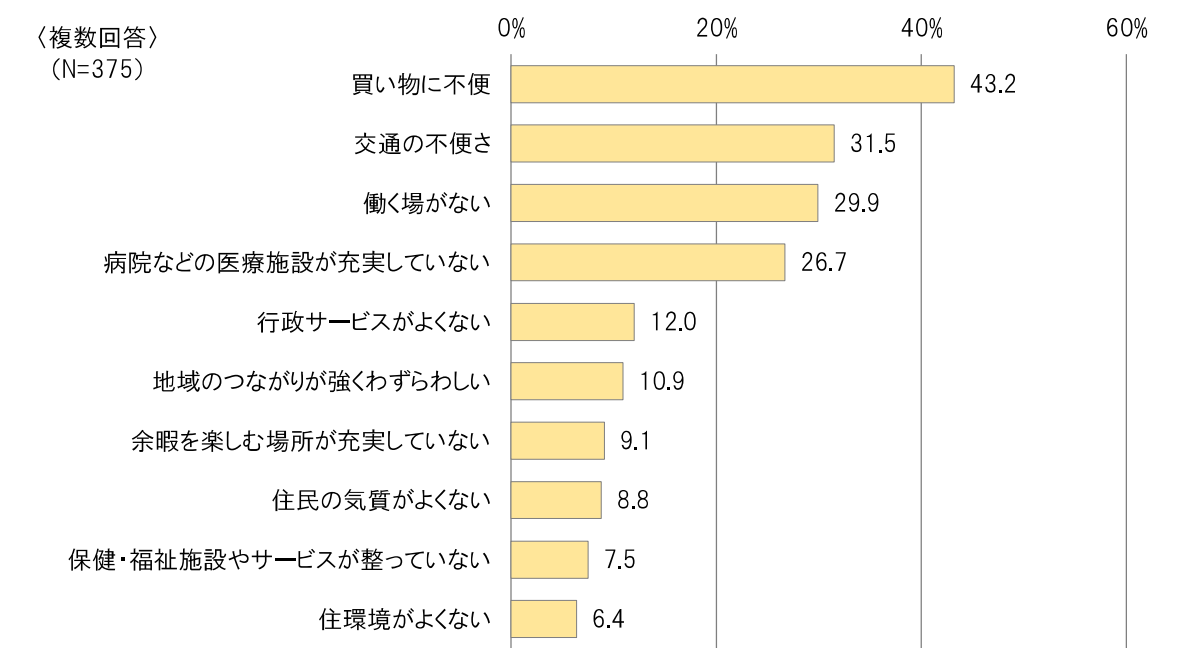
2 五ヶ瀬町は住みよいと思うか

町全体・地区別どちらにおいても、「住みよい」と「まあまあ住みよい」を合計した割合が約8割を占めています。

〈単数回答〉



「住みにくい」「あまり住みよくない」と回答した理由についてみると、「買い物に不便」が43.2%と最も高く、次いで「交通の不便さ」が31.5%、「働く場がない」が29.9%となっています。



※上位 10 項目のみ

「住みにくい」「あまり住みよくない」と回答した理由について地区別にみると、「買い物に不便」「交通の不便さ」「働く場がない」「病院などの医療施設が充実していない」の回答がどの地区においても高くなっています。

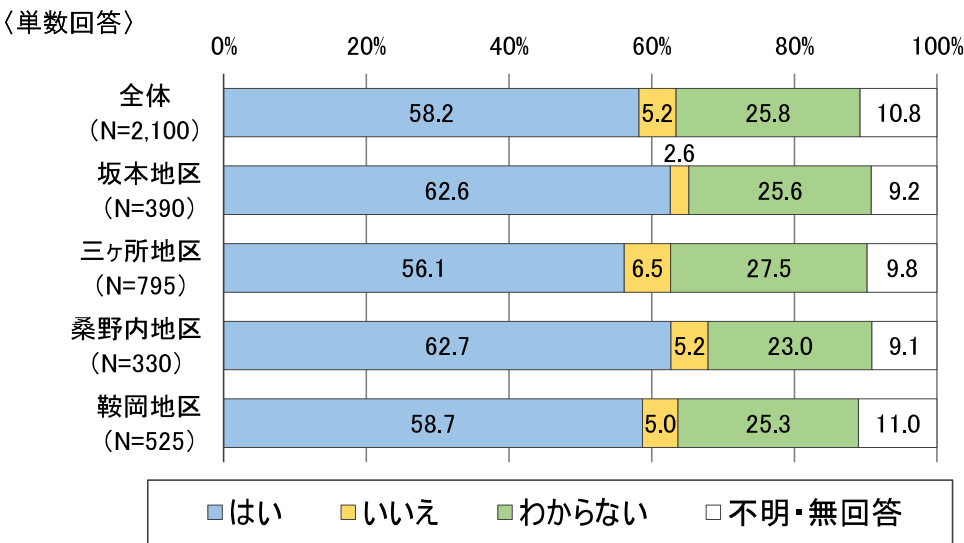
	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
全体 (N=375)	買い物に不便 43.2%	交通の不便さ 31.5%	働く場がない 29.9%	病院などの医療施設が 充実していない 26.7%	行政サービスが よくない 12.0%
坂本地区 (N=70)	買い物に不便 45.7%	交通の不便さ 38.6%	働く場がない 32.9%	病院などの医療施設が 充実していない 27.1%	行政サービスが よくない 15.7%
三ヶ所地区 (N=144)	買い物に不便 43.8%	働く場がない 病院などの医療施設が 充実していない 29.2%	交通の不便さ 26.4%	余暇を楽しむ場所が 充実していない 15.3%	行政サービスが よくない 14.6%
桑野内地区 (N=60)	働く場がない 40.0%	買い物に不便 38.3%	病院などの医療施設が 充実していない 25.0%	交通の不便さ 23.3%	住民の気質がよくない 地域のつながりが強く わずらわしい 11.7%
鞍岡地区 (N=93)	買い物に不便 44.1%	交通の不便さ 38.7%	病院などの医療施設が 充実していない 24.7%	働く場がない 22.6%	住民の気質がよくない 12.9%

※上位 5 項目のみ

3 定住意向

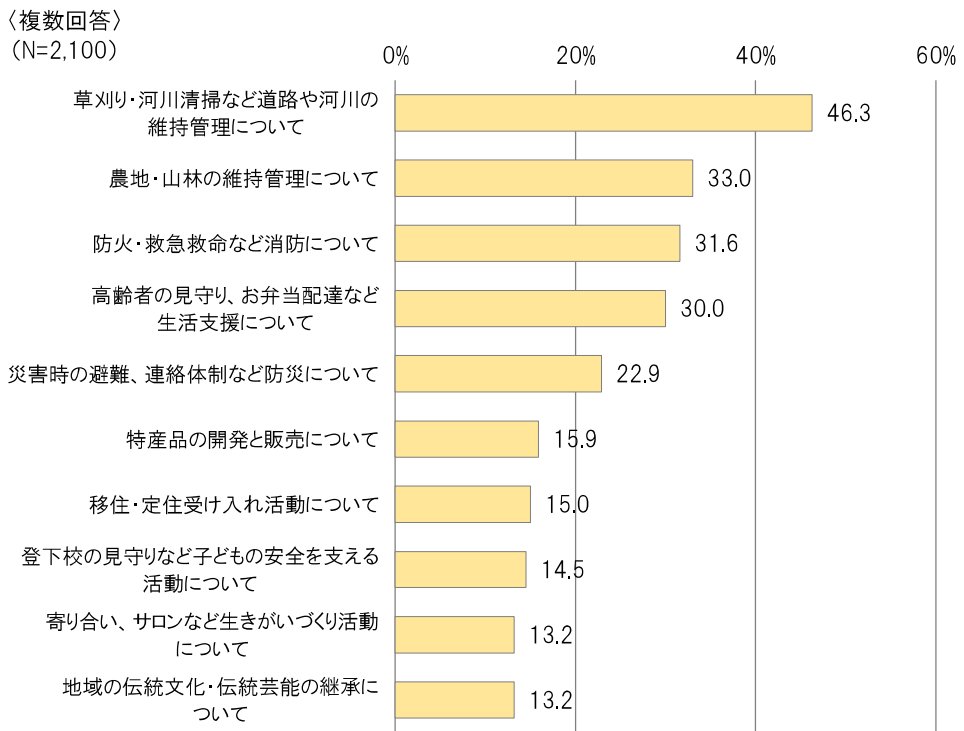
これからも五ヶ瀬町に住み続けたいと思うかについて、町全体・地区別のどちらにおいても「はい」（住み続けたい）が約6割を占めています。

地区別にみると、坂本地区、桑野内地区については、他の2地区より「はい」（住み続けたい）の割合が比較的高くなっています。



4 生活をする上で重要だと思う活動・事業

「草刈り・河川清掃など道路や河川の維持管理について」が 46.3%と最も高く、次いで「農地・山林の維持管理について」が 33.0%、「防火・救急救命など消防について」が 31.6%となっています。

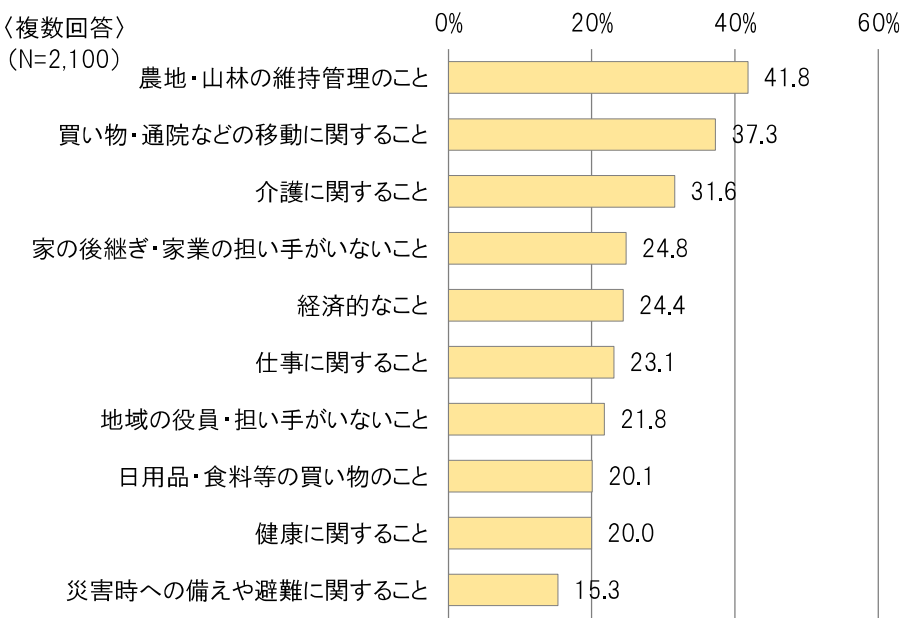


※上位 10 項目のみ



5 生活する上で不安に感じていること

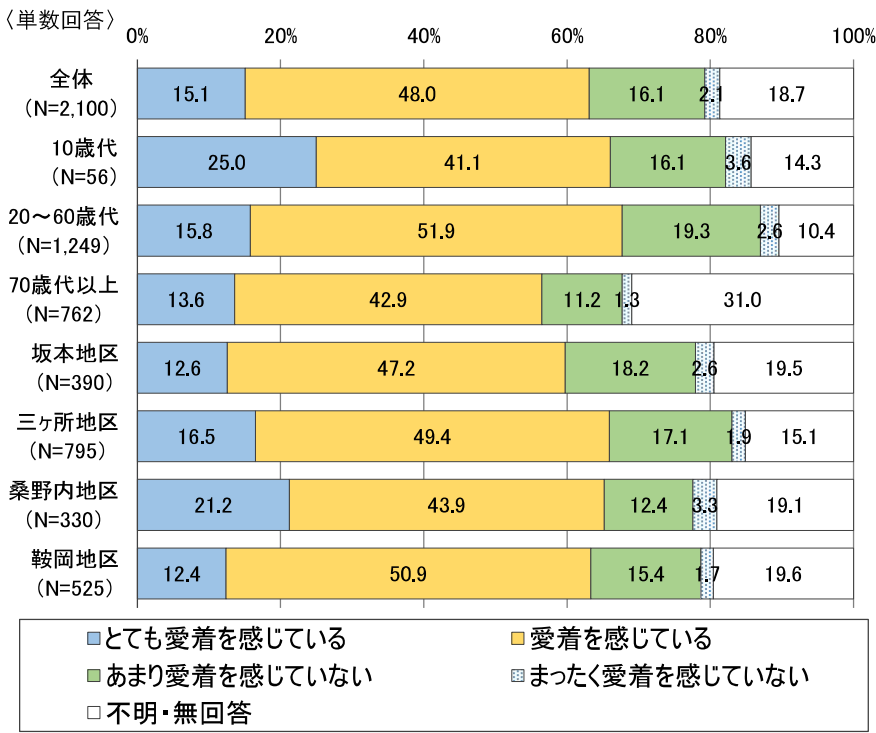
「農地・山林の維持管理のこと」が 41.8%と最も高く、次いで「買い物・通院などの移動に関すること」が 37.3%、「介護に関すること」が 31.6%となっています。



※上位 10 項目のみ

6 愛着度

町全体でみると、五ヶ瀬町に対して「愛着を感じている」が 48.0%と最も高くなっています。
年齢別にみると、「とても愛着を感じている」が 10 歳代で 25.0%と他の年代より高くなっています。
地区別にみると、「とても愛着を感じている」が、桑野内地区で 21.2%と他の地区より比較的高くなっています。



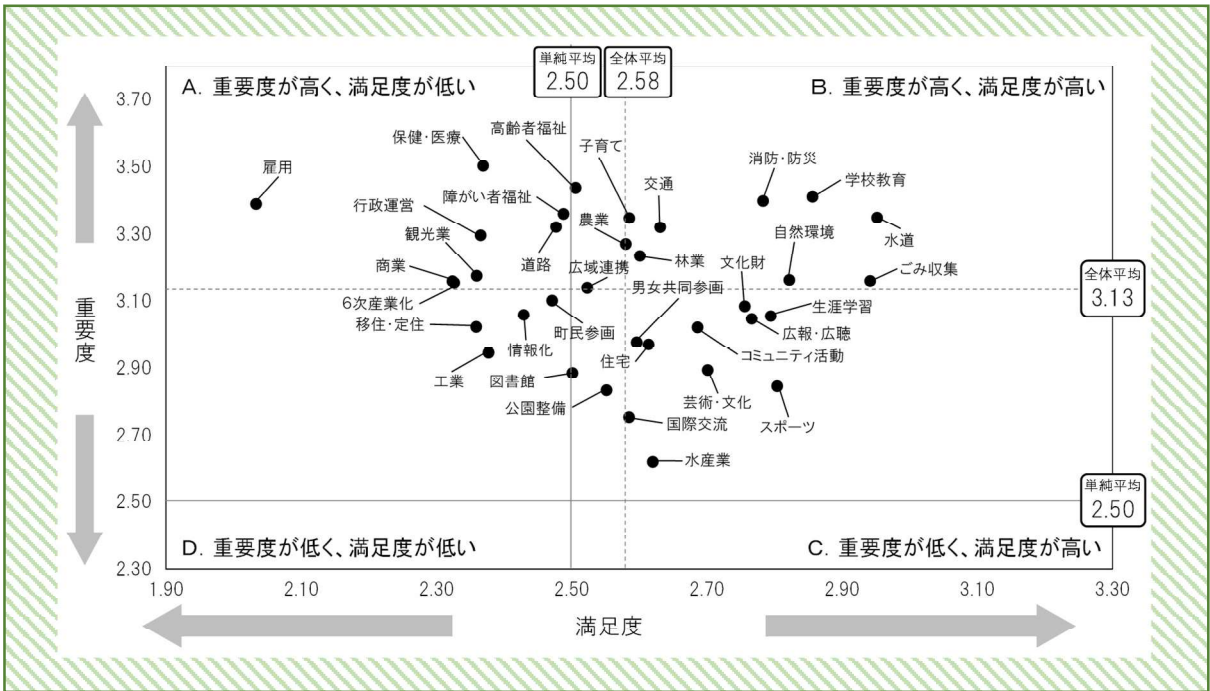
7 施策の重要度と満足度

重要度と満足度（加重平均値）の分布図（住民全体）

本町が行っている施策について、その分野ごとに「重要度」「満足度」を回答していただきました。本町の強みともいえる「重要度が高く、満足度が高い」項目については、主なものとして「水道」「学校教育」「消防・防災」等が挙げられています。逆に、今後の重点課題ともいえる「重要度が高く、満足度が低い」項目については、主なものとして「雇用」「保健・医療」「行政運営」等が挙げられています。

選択肢及び配点方法

満足度 ／重要度	満足 ／きわめて重要	やや満足 ／重要	やや不満 ／あまり重要でない	不満 ／重要でない
配点	+ 4 点	+ 3 点	+ 2 点	+ 1 点



※図表中の項目名は、記載の都合上、実際の選択肢における項目名を簡略化したものです。

重要度が高い項目・満足度が低い項目

順位	重要度（高い順）		順位	満足度（低い順）	
1位	保健・医療体制の充実	3.50	35位	雇用対策（企業誘致など）	2.03
2位	高齢者福祉の充実	3.44	34位	商業の振興	2.32
3位	小・中学校教育の充実・教育環境の整備	3.41	33位	6次産業化 【※1】・農工商連携の推進	2.33
4位	消防・防災体制の充実	3.40	32位	移住・定住対策の推進	2.36
5位	雇用対策（企業誘致など）	3.39	31位	観光業の振興	2.36

【※1】 **6次産業化**… 1次産業としての農林水産業と、2次産業としての製造業、3次産業としてのサービス業等の事業を総合的かつ一体的に推進し、豊かな地域資源を活用した新たな付加価値を生み出す取り組みのこと。

（４）時代の潮流とまちづくりの課題

1 少子高齢社会の到来と人口減少

日本における人口は、平成 20 年に人口増加のピークを迎えて以降、減少しています。しかしながら、高齢者の割合は年々増加しており、令和 16 年には日本の人口の 3 人に 1 人が高齢者になるといわれています。また、2019 年の出生数（推計）は 86 万 4,000 人と過去最少を記録し、一旦は 1.45 まで回復した**合計特殊出生率**【※1】もここ数年微減傾向にあります。

高齢化・少子化の進行による、人口（特に生産年齢人口）の減少により、労働供給の減少、地域・社会の担い手の減少、現役世代の負担の増加など、社会経済に多大な影響を及ぼすことが考えられます。

✓ 五ヶ瀬町での現状・課題

令和 2 年（4 月時点）の総人口は 3,763 人となっており、このまま推移すると、今後も減少していくことが考えられます。人口減少だけでなく、町の活力を担う現役世代が町外へと流出している現状もあり、解決に向けて様々な取り組みを講じていく必要があります。

2 子育て支援、学びの充実

国では保育の受け皿確保、幼児教育・保育の無償化等、子育て支援の充実に向けた取り組みが進められています。

また、学校教育では新学習指導要領（平成 29 年告示）において、子どもたちの「生きる力」を育むこととされています。さらには、学校教育における **ICT**【※2】環境の実現に向け、学校教育の現場において、子どもたち一人につき一台の PC 端末を整備することを掲げています。

✓ 五ヶ瀬町での現状・課題

令和元年の出生数は 19 人、令和 2 年（4 月時点）の 15 歳未満の人口は 481 人となっており、子どもの人口が減少していく中、どの家庭も望む子育てを実現できるための支援や、地域特性を活かした教育の充実が求められています。

そういった中、町では幼児から高齢者までがともに学び合う「五ヶ瀬教育グランドビジョン」を掲げ、地域創造・循環型の教育システムを通じた人づくりに取り組んでいます。

【※1】**合計特殊出生率**…一人の女性が生涯に産むと見込まれる子どもの数。その年の 15 歳から 49 歳までの女性が産んだ子どもの数を元に算出する。人口を維持できる水準は 2.07 とされ、将来の人口が増えるか減るかをみる指標となる。

【※2】**ICT**…「Information and Communication Technology」の略。情報技術に通信コミュニケーションの重要性を加味した言葉で、インターネットのような通信技術を利用した産業やサービスのこと。

3 人生 100 年時代の到来

高齢社会が現実のものとなり、今後は「人生 100 年時代」を迎えることが予想されており、そのような長寿社会において、高齢者がいきいきと活動できる社会づくりが求められています。また、高齢者だけでなく、若者も今後の 100 歳までの長寿社会を生きていくために、生涯にわたって、一人ひとりの価値観やライフスタイルに応じた暮らし方・働き方を選択できる環境が必要とされています。



五ヶ瀬町での現状・課題

令和 2 年（4 月時点）では高齢者人口が 1,587 人となり、総人口の約 42%を占めています。高齢者が住み慣れた地域で、いきいきと健康に過ごすことができるよう、福祉や医療、産業など様々な側面から環境整備を行っていくことが重要です。

4 安心・安全な暮らしの確保

東日本大震災以降、防災・減災の意識は高まっており、地震をはじめ、台風や集中豪雨等の災害が起きても安全の確保ができるまちづくりや、災害時における自助・共助の取り組みの強化が重要視されています。

また、令和 2 年に発生した新型コロナウイルスの全世界的な感染拡大は、日本社会にも多くの影響を及ぼしました。地域社会においても、住民が感染に対する不安に襲われる中、地域活動や産業に大きな停滞を生む結果となりました。このような未曾有の状況下にも対応し、住民の生活を守っていくことができるよう、行政のあり方の見直しを迫られています。



五ヶ瀬町での現状・課題

住宅や公共施設の老朽化が進んでおり、災害時に大きな被害をもたらすことが懸念されます。施設の整備や耐震化に加え、**自主防災組織**【※3】の設置等、災害に強いまちづくりを進めていく必要があるとともに、感染症の感染拡大を予防するという視点でのまちづくりも求められています。

【※3】 **自主防災組織**…地域住民が協力して、自分たちの地域を自分たちで守るために立ち上げる組織。



5 ICT 技術の発展

ICT（情報通信技術）の発達により、人々の暮らしや社会システムが大きく変化しており、あらゆる分野において、高度な ICT 技術やクラウドシステム【※1】が活用され、業務の効率化やサービス向上が図られています。また、場所や時間を問わず誰もがインターネットに接続でき、情報を受発信できる環境が構築された今、働き方や仕事の形態も変わりつつあります。

加えて、国は将来的に **IoT(Internet of Things)** 【※2】技術を活用し、**AI**【※3】やロボットが経済発展や社会的課題の解決に役立てられる「Society5.0」の実現を目指しています。



五ヶ瀬町での現状・課題

少子高齢化・人口減少に直面している本町においては、産業・医療・交通・教育等様々な分野において、ICT の活用による課題解決が期待されます。ICT 技術の積極的な導入により、様々な現場における業務の効率化や質の向上を進めることが重要です。

6 住民協働のまちづくりの推進

人口減少や核家族化に伴い、全国的に高齢化や自治会加入率の低下、住民間の交流の希薄化等が課題となっています。そのため、地域活動の担い手やボランティアへの参加者も減少しており、地域の活力低下につながっています。

これを受けて、地域のつながりの重要性が再認識されています。地域の住民同士の交流や活動、ボランティアへの参加をきっかけに、住民にまちづくりへ参画してもらい、住民協働のまちづくりを進めることが必要とされています。



五ヶ瀬町での現状・課題

本町においても今後、人口減少と高齢化に伴い、地域コミュニティの活力が低下していくことが考えられます。若い世代から高齢者まで様々な主体が協力し、地域の課題を自主的に解決していくことができるよう、地域づくりに対する意識を高めていく必要があります。

【※1】 **クラウドシステム**…インターネットなどのネットワークを経由し、データの保存やアプリケーションサービスの利用等を、利用者が各々のパソコンやスマートフォンで行うことができるシステム。

【※2】 **IoT**…「Internet of Things」の略。モノのインターネットと訳される。様々なモノがインターネットに接続され、相互に情報伝達できるようになること。

【※3】 **AI**…「Artificial Intelligence」の略。人間が持っている、認識や推論等の能力をコンピューターでも可能にするための技術の総称で、人工知能と呼ばれる。

7 地域の自立経営

地方では少子高齢化・人口減少による地域内経済の弱体化が顕著となっており、地域の抱える課題を行政だけでなく、住民や地域団体、企業や学校等、様々な主体で解決していく協働のまちづくりが必要とされています。そういった中、平成 27 年には「**まち・ひと・しごと創生法**」【※4】に基づき「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の策定が全国の自治体で努力義務とされました。このような取り組みを進めることで、持続可能性を見据えた地域の自立経営を目指すことが必要となっています。



五ヶ瀬町での現状・課題

本町においても、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、地域の特徴を活かしながら、町の自立運営・稼げる地域づくりを進めています。移住・定住や子育て支援、観光振興等の政策に対する KPI（重要業績評価指標）を設定することで、実効的な取り組みの推進を図っています。

8 グローバル化【※5】の進展

国を超えた経済活動や、人の流入が活発になっており、すでに多くの外国人労働者や外国人観光客が日本に訪れています。このことから、国際社会に応じた競争力の向上が重要になってくるとともに、**多文化共生**【※6】に向けた体制整備や、住民への理解促進が求められています。

また、平成 27 年に国連総会において、持続可能な社会を実現するための国際目標「持続可能な開発目標（SDGs）」が採択されました。今後自治体においても、SDGs を踏まえ、将来を見据えた上でのまちづくり体制の構築を進めていく必要があります。



五ヶ瀬町での現状・課題

近年、五ヶ瀬・高千穂地域は、高千穂町を中心として外国人観光客が増加していることから、本町においても、外国人観光客獲得に向けた**インバウンド**【※7】対策に加え、多文化共生に向けた体制整備や、住民の理解促進が求められています。

【※4】 **まち・ひと・しごと創生法**…人口急減・超高齢化という課題に対し、地域がそれぞれの特徴を活かした、自律的で持続的な社会を創生することを目指すための基本理念等を定めた法律。

【※5】 **グローバル化**…資本や労働力の国境を越えた移動が活発化するとともに、貿易を通じた商品・サービスの取引や、海外への投資が増大することによって世界における経済的な結びつきが深まること。

【※6】 **多文化共生**…国籍や民族などの異なる人々が、文化的な違いを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、ともに生きていくこと。

【※7】 **インバウンド**…観光において、外国人旅行者を自国へ誘致する動きや訪日外国人旅行のことを指す。



9 多様性を尊重しあう社会

日本には、高齢者や若者、子ども、障がいがある人、外国出身の人、**性的マイノリティ**【※1】の人など、様々な人が暮らしています。誰もが活躍でき、お互いを理解しながら多様性を認め合える**地域共生社会**【※2】・多文化共生社会の実現が求められています。

地域や社会において、世代や分野を超えて人々がつながり、個人や世帯が抱える問題に対応できる支援体制を構築していくことが、誰もが住みよいまちへつながると考えられます。



五ヶ瀬町での現状・課題

多様性を認め合える社会を取り巻く課題は、近年課題としてとらえられるようになったものが多く、本町においても、いまだに住民の認識が薄いのが現状です。すべての住民が自分らしくいきいきと暮らすまちづくりを目指すため、正しい知識の周知・啓発が必要です。

【※1】 **性的マイノリティ**…性的指向や性自認等に関してのありようが性的多数派とは異なるとされる人々のこと。

【※2】 **地域共生社会**…社会構造や暮らしの変化に応じて、制度・分野ごとの「縦割り」や「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがいを地域とともに創っていく社会のこと。

第2部 基本構想

Grand Vision

第1章

五ヶ瀬町の将来像

第2章

五ヶ瀬町の将来人口

第3章

基本計画の方針

第1章

五ヶ瀬町の将来像



(1) 五ヶ瀬町の将来像

五ヶ瀬町には、自然・景観・農作物等をはじめとした多くの地域資源や、里山の環境で育まれた住民個々人の温かな人間性・地域性など、誇るべき多くの魅力があふれています。

第5次計画においては、本町の人・自然等に秘められた可能性を最大限に引き出すとともに、住民同士が互いに支えあう心豊かな暮らしを目指し、「ずっと五ヶ瀬 やっぱり五ヶ瀬 ～ありがとう あふれる笑顔～」を将来像として、まちづくりを推進してきました。

今後のまちづくりにおいては、将来的に予測される人口減少を解決していく仕組みづくり、目まぐるしく変化していく社会情勢に対応していく地域づくりを、長期的な視点で進めていくことが必要です。そのためには、豊かな自然環境や地域の繋がり、温かな人間性といった本町の魅力・強みを再認識し、最大限に活用・発揮するとともに、町の活力を構成する住民一人ひとりが、より一層地域づくりへと参画することが重要となってきます。

以上の考え方を踏まえ、第6次計画においては、将来像を

人と『ともに』 地域と『ともに』 自然と『ともに』

～ 笑顔でつながるまち 五ヶ瀬 ～

としました。

■ 将来像をイメージしたロゴマーク



これまで人・地域・自然が共存・共栄し、営みを続けてきた本町にとって、これら3つの要素はどれも不可分であり、欠かすことができないものです。そこで、人・地域・自然それぞれの魅力が将来長きにわたり守られ、かつ最大限に発揮された町の姿こそが本町の理想像であると、上記の将来像を設定しました。将来像の実現に向け、行政や地域住民をはじめとした様々な主体が力を合わせながら、まちづくりを進めます。

また、町の将来像を実現していく中で、人・地域・自然がもたらす恩恵や魅力のもと、住民誰もが暮らしに幸せを感じ、笑顔になれるようなまちづくりを進めます。そして、町を訪れる誰もが、笑顔あふれる人々や地域と接する中で、自分も笑顔になれるような、「笑顔でつながるまち」の実現を目指します。



（２）将来像実現のための視点

将来像を実現させる上で必要な視点として、以下の３つの視点を設定しました。この３つの視点は、行政が取り組む様々な施策においてはもちろん、住民をはじめとした、本町に関わる一人ひとりの取り組みにおいても、前提にしていく考え方となります。

本町の持つ「地域資源」をその活力の源泉としながら、地域を構成する「人」を育んでいくことで、「持続可能な地域づくり」を可能としていくという流れを創出し、将来像実現までの道のりをより具体的なものにしていきます。

１ 五ヶ瀬を支える人づくり

本町の活力を維持し、今後もより良いまちづくりを行っていくためには、その担い手となる「人」の存在が不可欠です。

本町に移住・定住する人口を増やすことはもちろん、本町のまちづくりや産業に様々な側面から携わる人材の確保・育成を進めます。また、住民一人ひとりに対して、まちづくりへの参画意識のさらなる高揚を促進していくとともに、子どもたちに対しては、五ヶ瀬町の魅力を学ぶ郷土教育を進めることで、五ヶ瀬町を愛し、将来のまちづくりを担う人材を育成します。

２ 五ヶ瀬の持続可能な地域づくり

将来にわたって、本町での暮らしを維持していくためには、住民との協働による支えあいや、地域経済のあり方を見直していく必要があります。

そこで、本町では、地域の人口や経済状況についての分析をもとに、地域が将来的に直面する課題を早期から把握し、効果的な対策を講じていくことを目指します。

特に、少子高齢化・人口減少に対する対策は急務であり、若い世代の移住・定住の促進を図るだけでなく、高齢社会に対応した「支えあい」の地域づくりを進めることも重要です。地域活動やコミュニティ【※１】内での交流を活発化させながら、住民との協働のもと、本町の特性や風土を活かした持続可能な地域づくりを推進します。

３ 五ヶ瀬の魅力ある地域資源の活用

本町には、豊かな里山環境に由来する農林産物や観光資源のほか、地域で受け継がれてきた伝統行事など、魅力ある地域資源が多くあります。新たな特産品開発や、グリーンツーリズム【※２】の振興等、魅力ある地域資源を最大限に活用したまちづくりを推進します。

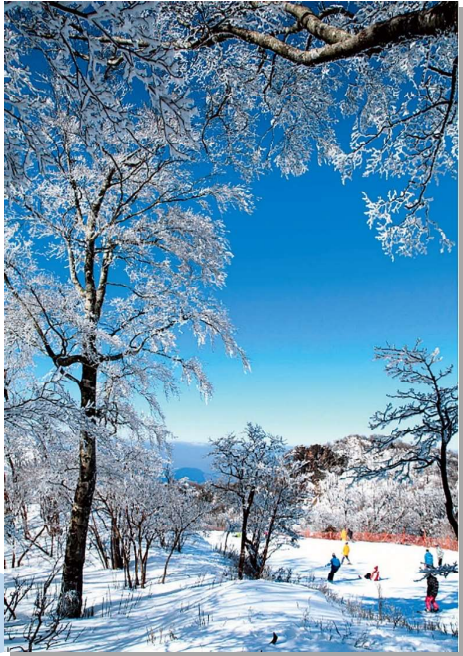
また、自然環境の保護や伝統行事の継承等、地域資源を維持していくための取り組みを推進するとともに、より多くの人に本町を知ってもらうための効果的な魅力発信を行います。

【※１】 コミュニティ…地方など、地域性と共同性という二つの要件を中心に構成されている社会のこと。特に地縁によって自然発生的に成立した基礎社会をいう。

【※２】 グリーンツーリズム…都市住民が農家などにホームステイして農作業体験をするなど、その地域の歴史や自然に親しむ余暇活動。

第2章

五ヶ瀬町の将来人口

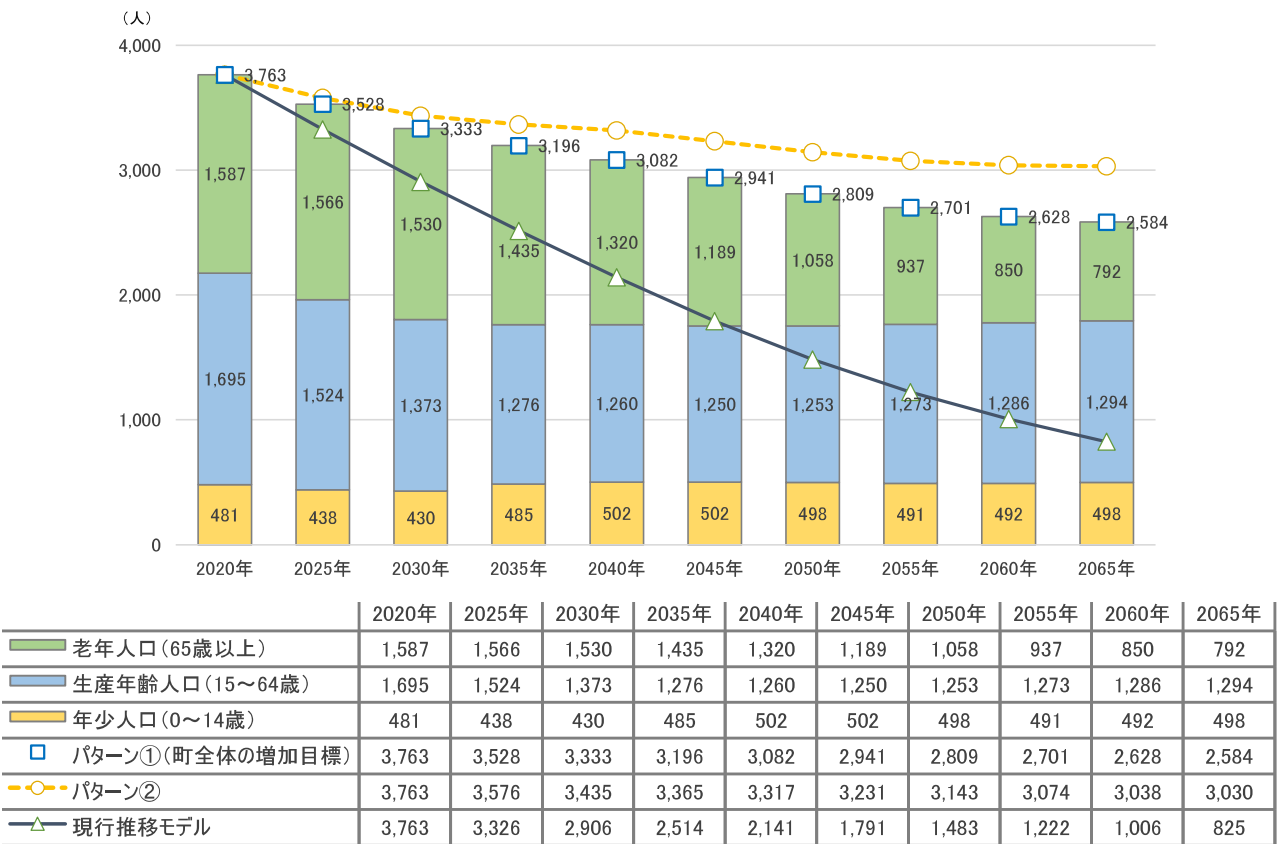


(1) 将来人口の予測

2015 年及び 2020 年における 4 月末時点の住民基本台帳データを基に、人口を推計した場合、人口推移は下記のグラフにおける「現行推移モデル」の数値となります。この場合、人口減少に歯止めがかからず、高齢化率も 50% 台後半まで増加していくこととなります。

町として定住人口の増加を図り、人口減少に歯止めをかけた場合の推計結果が下記のグラフにおける「パターン①」「パターン②」の数値となります。

なお、合計特殊出生率については、2020 年時点の 2.17 を維持することを前提としています。



※「パターン①」のグラフは棒グラフで表記し、年齢3区分別の人口を記載しています。
「パターン②」「現行推移モデル」は折れ線グラフで表記し、総人口のみを記載しています。

(2) 人口の安定化シナリオ

今後の町の人口については、「人づくり」を進め、「持続可能性」を強みとして、「地域資源の活用」を図ることで、定住増加を推進し、長期的な人口安定化を実現していきます。

なお、新たに人口が転入するだけでなく、人口の流出を抑制することも、同じく定住増加に向けて効果を発揮していると考えます。

1 パターン①（一年あたり 15 世帯 35 人が新たに定住する場合）

下記の内訳で新たに人口が毎年転入した場合、人口は 2,500 人以上で安定し、2040 年まで人口は 3,000 人以上で維持されます。さらに、2065 年には、高齢化率は約 30%まで低下します。

移住・定住者の属性	世帯数	人数
20 代前半の男女	5 世帯	10 人
30 代前半の夫婦、4 歳以下の子ども 1 名	5 世帯	15 人
60 代前半の夫婦	5 世帯	10 人
合計	15 世帯	35 人
五ヶ瀬町全体の人口に占める毎年の定住増加人数の割合		1.0%分



2030 年時の人口フレーム

町人口 **3,333** 人（2020 年比 89%）

高齢化率 **45.9%**（2020 年比 3.7%上昇）

2 パターン②（一年あたり 19 世帯 43 人が新たに定住する場合）

下記の内訳で新たに人口が毎年転入した場合、人口は 2,500 人以上で安定し、さらに、2045 年以降も人口は 3,000 人以上で維持されます。

移住・定住者の属性	世帯数	人数
20 代前半の男女	6 世帯	12 人
30 代前半の夫婦、4 歳以下の子ども 1 名	6 世帯	18 人
60 代前半の夫婦	6 世帯	12 人
20 代後半女性	1 世帯	1 人
合計	19 世帯	43 人
五ヶ瀬町全体の人口に占める毎年の定住増加人数の割合		1.1%分



2030 年時の人口フレーム

町人口 **3,435** 人（2020 年比 91%）

高齢化率 **44.8%**（2020 年比 2.6%上昇）

第3章

基本計画 の方針



(1) 基本目標について

本町が目指す将来像を実現するため、基本計画においては、以下の5つの基本目標を定め、各分野の施策を推進するための指針とします。

1 安心して快適な暮らしを維持する

山間地に位置する本町において、生活基盤の維持・整備は必要不可欠であり、また、高齢化の急速な進行への対応や、若い世代・子育て世帯の定住促進という視点からも、快適かつ利便性の高い生活環境の整備が重要となっています。

住民が快適に暮らすことができる地域・環境を実現していくとともに、防災・防犯に向けた取り組みも推進していくことで、常に安心・安全に暮らすことができる生活基盤を確保していきます。

2 魅力・活力を生み出す

本町には、釜炒り茶やしいたけ、ワインなど多くの特産品があり、農林業等と連携した6次産業化や、農産物のブランド化に力を入れています。また、五ヶ瀬ハイランドスキー場や五ヶ瀬ワイナリー、Gパークなど、いくつかの観光拠点を核とした地域ぐるみの観光振興にも取り組んでいます。

一方で、過疎化に伴う廃業や中心市街地の活力低下により、町内の雇用の場も失われ、さらに過疎化が進行するという悪循環が課題となっています。

本町は農林業が基幹産業であり、今後も本町の特性を活かした農林業や商業・観光振興を図っていくとともに、地域経済を維持していくため、地域内消費・生産の仕組みづくりや、雇用の場の確保に力を入れていきます。



3 地域で支えあい、健康で生涯元気に暮らす

近年の少子高齢化の進行や地域コミュニティのあり方の変化に伴い、多様な福祉ニーズの増加や、複合的な課題を抱える方への対応の充実が求められています。特に、急速な高齢化の進行により、保健・医療・福祉の分野を超えた連携の重要性が高まっています。

保健・医療・福祉の充実により、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らすことができ、かつ誰もが幸せに生活を送ることができるまちづくりを目指します。

4 豊かな人・心を育む

本町では、令和元年5月に制定した「五ヶ瀬教育グランドビジョン」をもとに、幼児から高齢者までの幅広い世代の住民がともに、生涯にわたって互いに関わり合いながら、学び合い続けることができるシステムの構築を進めています。

学校教育においては、子どもたちがこの環境の中でいきいきと学び、五ヶ瀬の魅力を発見・創造する人材を育成することを目指します。

また、社会教育やスポーツ、文化・芸術活動等を通して、日常の様々な場面において学びと体験を提供し、住民一人ひとりが心豊かに生きることができる環境を整備します。

5 持続可能なまちづくりを推進する

本町では現在、地域が主体となった協働のまちづくりを推進しています。今後も進行すると考えられる少子高齢化・人口減少に対応すべく、持続可能な地域づくりという視点から、コミュニティのさらなる活性化を目指すとともに、協働のまちづくりをより効果的に進めていくため、行政は情報発信の強化をはじめとした、広報・広聴の充実を図ります。

また、行政機能をより効率的・効果的なものにするため、行政運営のあり方を見直していくとともに、地域や社会の変化に対応できる職員の育成を図ります。

(2) 計画の体系

将来像実現のための視点

- 1 五ヶ瀬を支える人づくり
- 2 五ヶ瀬の持続可能な地域づくり
- 3 五ヶ瀬の魅力ある地域資源の活用

